

泉の廃寺 光宗寺

常陸大宮市域には、かつて多くの寺院がありました。江戸時代前期の寛文年間（1661～1673）の時点で、常陸大宮市域には少なくとも200を超える寺院が存在したことがわかっています。しかし、徳川光圀や徳川斉昭が実施した寺社改革や、明治初期の廃仏毀釈によって、寺院の多くがその姿を失いました。現在は、地名やわずかな史料、伝承からその痕跡をうかがうことができますが、その実態については不明なことが多いです。今回は、その中から、泉地区にかつて存在した光宗寺について紹介していきます。

◇光宗寺の創立と歴史

婦命山源空院光宗寺は、泉字下ノ寺に所在した浄土宗の寺院です。現在は集合墓地となっていますが、境内には歴代住職の墓塔と菩提樹がわずかに現存することから、寺院跡であることがうかがえます。常福寺（那珂市瓜連）が作成した由緒書によると、当初は源空院という小寺でしたが、永禄10年（1567）に前小屋美作という人物が菩提寺として改修したとされており、院号に前身である「源空院」の名を確認できます。源空院の創建時期は不明ですが、墓地に所在する石塔（後述）から、少なくとも戦国時代には存在していたものと考えられます。また、同じく常福寺が作成した「諸末起因」によると、開山には常福寺9世の空誉玉泉上人が携わったことが伝えられています。江戸時代の光宗寺については記録が存在しないため、詳細な歴史を知ることは難しいですが、少なくとも寛文3年（1663）の時点で105人の檀那が所属していたことが由緒書から

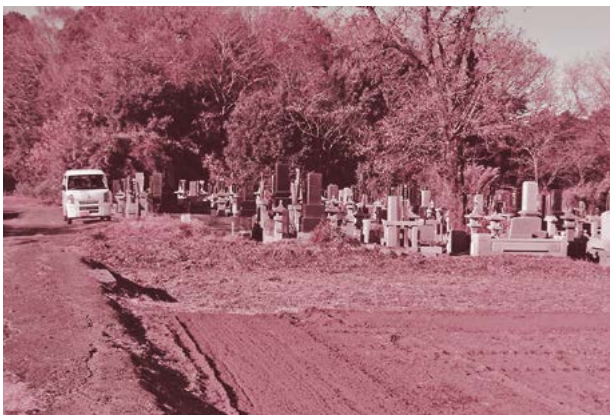


写真1 光宗寺跡地（泉地区）



写真2 光宗寺由緒書（常福寺蔵）

確認できます。しかし、一方で「四年以上無住故」とあることから、住職不在の時期も存在したようです。墓塔から、延享2年（1745）には寺院が所在していたと確認できますが、安政2年（1855）の記録には光宗寺の記述が見られないことから、この時点で既に破却され、廃寺になっていたと考えられます。

◇光宗寺と前小屋氏の関係

光宗寺を再興した前小屋氏は、前小屋城を拠点とした佐竹氏の一族です。小場氏4代当主である義実の子・義広が前小屋村（泉の旧地名）に居住して前小屋氏を称したのが始まりとされており、その時期は15世紀後半にさかのぼると推測されます。以来、慶長7年（1602）に秋田へ下るまで約100年もの間、前小屋村の領主として活動しました。由緒書に記された「前小屋美作」なる人物の詳細は不明ですが、光宗寺には前小屋氏一族の位牌と墓塔が所在したことが「諸末起因」に記されています。位牌については所在不明となっていますが、石塔に関しては墓地の一角に中世五輪塔・宝篋印塔の一部が所在しており、中には15世紀の製作と見られる事例も確認されています。前小屋義広が前小屋村に居住したとされる時期と石の造立年代が近いことから、前小屋氏に関連する石塔である可能性が高く、同氏の菩提寺として営まれていたことがうかがえます。

【参考文献】

- ・大宮町史編さん委員会編『大宮町史』昭和52年
- ・瓜連町史編さん委員会編『瓜連町史』昭和61年

(高橋拓也)

■問い合わせ■

文書館 ☎52-0571